

室内画の基礎的研究

— Big Five モデルとの関連から —

西 珠美

1. 問題・目的

室内画 (Raum Test / Room-Drawing-Test) とは、徳田 (1981) によって発案された描画法の一種である。まず家を1軒思い浮かべて描いてもらい (家屋画), 完成したら, その家の中にある部屋を1つイメージし, 別の紙に描いてもらう。この室内の絵が室内画である。室内画が誕生するきっかけとなったのは, 井上 (1979) が考案した「家屋画二面法」であった。これは家屋画 (家のオモテ) を描いてもらった後にその紙を裏返して家屋のウラを描いてもらうという手法をとり, オモテとウラの両面から家の佇まいを眺めるものである。これに対して徳田 (1981) は, 家屋が「いかに強固な壁に守られていても内部が居心地よくしつらえてなければ『安らぎの空間』 (Bollnow, 1963) としての意味は持たない」との観点から, 外から見た家屋の姿に続いて, その家屋の内部空間としての部屋, すなわち内側から見た姿を描いてもらう室内画を編み出した。

室内画発案の基となった井上 (1979) では, 家屋の意味は「外界から安心して住まえる空間を切り取って保障するもの」と捉え直されている。徳田 (1981) はそれを踏まえつつ, 家屋が家足り得る条件としての内部空間の存在と, 先述したような家屋の内部空間のしつらえ方に着目し, 室内空間を描く技法として室内画を生み出した。従ってこれまでの室内画研究においては, 家屋画・室内画には「外界から内界をどのように守っているか, 外界・内界をどのように捉えているか」 (古野, 2005) ということや, 個人を取り巻く空間イメージとそれを一歩外側の視点から捉えたものが表れている (山森, 1999) と言われてきた。このことは家屋画に表れた描き手の心的世界を理解するうえで新たな視点を与え, 室内画という技法の独自性や構造的な特性に関する知見を提供して提供してきたと考えられるが, 一方でこれらの知見は主に Bollnow (1963) の空間論や家という空間の心理学的イメージに基づいて考察されてきたものであり, 実証的な検討は未だ十分に積み重ねられてはいない。これを補うであろう室内画の基礎研究では, 投映法や質問紙法との関連が論じられてきた。三溝 (2006) は YG 性格検査に表れる性格特徴との関連から室内画の境界線が持つ意味について考察している。ここでは室内画と D (抑うつ性), N (神経質), Co (非協調的) といった「自分の内界に関与する尺度」 (三溝, 2006) の影響が認められている。続く三溝 (2007) では室内画と風景構成法 (LMT) が組み合わせて用いられており, 室内の境界線が持つ意味について考察されている。ここでは, LMT に描かれた人物の位置を検討することで境界線には描き手が外界に位置付けている自身の存在

をめぐる状況が表れることが示唆されている。一方古野(2008)は、Rorschach Testの反応領域・運動反応・反応との距離の取り方と、描画に表れた室内空間の捉え方を合わせて検討し、描かれた内部空間に対する距離の取り方あるいは態度に主体の在り様がどのように反映しているのかということ考察している。三溝(2008)は室内画を遠近法という観点から分類し、その類型間の特徴をバウムテストの幹先端処理との関連から考察しており、幹先端を何らかの形で包む「包冠」が表現されている「冠型」のバウムが室内を真上から見下ろす「配置図型」で有意に多く見られたという結果を見出している。そしてこのことから、バウムに表れた外界との間に何らかの境界領域を作ろうとする感覚と、室内画でみられた遠く離れた視点から室内を一望する描き手の心性との関連を述べている。

以上のように、室内画の基礎研究は“室内の境界線”と“室内空間を見る視点”の2つに主眼を置いて検討されてきており、室内空間にどのようなアイテムが配置されているか、その空間の性質はどのようなものか、などの点は検討されておらず、室内画表現を評価する観点到偏りがあると言える。またそれゆえに、バウムテストやLMTといった他の描画法と組み合わせることで技法としての室内画の独自性を浮かび上げようという試みはなされているものの、描画のどのような指標に描き手のどのような心理的特徴が表れているのかといった技法としての基礎的な部分が、先行研究では十分に検討されていないままである。山森(2002)や古野(2005)においては心身症患者の描いた室内画が事例的に取り上げられているが、現在のところ室内画の解釈は見る者の臨床経験や主観的感覚による部分が大きく、室内画表現を解釈するうえでの客観的な基準が未だ存在しないことも室内画研究における大きな課題となっている。

そこで本研究は、室内画と一般的なパーソナリティ特性との関連を実証的に検討することで、室内画に表現される心理的特徴の様相を数量的側面から明らかにすることを試みる。まず室内画の評価においては、境界線や描き手の視点に留まらず室内画の表現を広い観点から探索的に検討するために、空間構成の在りようを見る山森(2002)の指標に加え、家屋画・室内画において各描画に何がいかにか描かれているかというcontentに着目した梅村(2016)の指標を用いて分析を行う。また、室内画の分析指標の解釈についてはその妥当性も課題として指摘されているため(梅村, 2016)、信頼性や妥当性が比較的高いパーソナリティ特性の尺度との関連を示すことで、室内画のより適切な解釈に寄与することができると考えられる。パーソナリティの基本的側面に関しては、多様な集団において様々な手法を用いた研究が長年にわたって実施されてきたが、1980年代に入ると“人間のパーソナリティの基本的な特徴は5つの因子で成り立っている”という合意が多く、パーソナリティ心理学者の間で形成され始めた(McCrae & John, 1992)。いわゆるBig Fiveモデルと呼ばれるものである。5つの因子はそれぞれ情緒不安定性(Neuroticism, 以下N)・外向性(Extraversion, 以下E)・開放性(Openness, 以下O)・調和性(Agreeableness, 以下A)・誠実性(Conscientiousness, 以下C)を指し、この5つがパーソナリティを構成する基本的特性次元であると考えられている。Nは「情緒が安定しているかどうかに関わる領域」(大山, 2015)であり、ストレスなどの危機への敏感さを表す(杉浦・丹野, 2008)と言われている。Eは「外向的であるかどうかに関わる領域」(大山, 2015)であり、刺激の希求性や「人との関係などで外界に積極的に働きかけるかどうか」(杉浦・丹野, 2008)を表すと言われている。Oは「新しいものを柔軟に受け入れ、洗練された感性を持っているかど

うかに関わる領域」(大山, 2015)で、イメージや思考の豊かさや知能・創造性との関連、複雑であることを許容できるかどうかの次元であるという(小塩, 2010)。Aは「他人と協調し調和的にやっていくかどうかに関わる領域」(大山, 2015)で、社会や共同体への志向性の次元である(小塩, 2010)。Cは「まじめに役割をこなしていくかどうかに関わる領域」(大山, 2015)「はっきりとした意志や目的をもってものごとをやり抜こうとするか否かの次元」(杉浦・丹野, 2008)で、欲求や衝動をコントロールする力に関連がある(小塩, 2010)と言われている。Big Fiveモデルは、辞書からパーソナリティ特性用語を収集する語彙アプローチなどから5因子が安定して抽出された結果生まれたもの(和田, 1996)、すなわち何らかの背景理論をもとに演繹的に生成されたものではなく、ボトムアップ的に見出されてきたものである。さらにこのモデルは主に健康的な性格側面を、観察や調査を基礎にして探求しようとする実証的アプローチによって、一般成人を対象に発展してきたものでもある。よって、病理的指標に留まらず、人間のパーソナリティを包括的に捉えることができると考えられている(国里他, 2008)。また、5因子の中には外界に向けての活動を本質とするEや他者との関係を本質とするAがあり、個人の内界と外界との関係を捉えていると言われてきた室内画と組み合わせるに有用であると思われる。従って本研究ではこのモデルに基づいたパーソナリティ特性の測定尺度を採用する。

以上を踏まえ本研究では、室内画の基礎研究の一環として一般的なパーソナリティと室内画表現との関連を数量的側面から検討することで、室内画の理解や解釈について理論的・臨床的視座からの知見を補完し、基礎的資料を提供することを目的とする。

2. 方法

(1) 測定尺度と質問紙の構成

i. Big Five 尺度

和田(1996)により作成されたBig Five尺度を用いた。同じくBig Fiveを測定するNEO-P-IR(Costa & McCrae, 1992)などの文章型の項目から構成される質問紙と比べて、Big Five尺度は60項目の形容詞(特性語)から構成され、文章型の尺度よりも短時間で実施することができ、調査協力者の負担も少ないと考えられたため、当尺度を採用した。また、尺度構成は大学生を対象になされているため、測定対象という点においても本研究の目的に合ったものと考えられた。この尺度の信頼性と妥当性は和田(1996)によって確認されていた。

ii. 室内画

徳田(1981)の手順通りまず家屋画を描いてもらい、次に室内画を描いてもらった。家屋画の教示は「家を1軒思い浮かべてください。どんなものでも結構です。それはどんな家でしょうか。それでは、その家の絵(その家を外から見た絵)を描いてください」、室内画の教示は「先ほど描いた家の絵を見てください。その家の中にある1つの部屋を思い浮かべてください。それはどんな部屋でしょうか。どんな家具があるでしょうか。それでは、その部屋の中の絵を描いてください」であった。

iii. 質問紙の構成

今回は調査実施場所の都合上、時間内に回答が終わらない場合は質問紙を持ち帰り後日提出

してもらおうという形式をとったため、自宅描画の方法を採択した古野（2005）を参考に質問紙を構成した。まずフェイスシートに調査の概要と倫理的配慮についての説明を記載し、調査協力への同意を「はい」か「いいえ」どちらかを選択するという形で表明してもらった。そして「はい」を選んだ協力者のみ年齢・学年・性別を記入してもらい、Big Five 尺度への回答を求めた。次に「家屋画」と「室内画」を実施した。描画実施の前に、絵の上手さを見るものではないので思った通り描いてほしいこと、同封してある画用紙と鉛筆、消しゴム以外は描画に用いないこと、持ち帰る場合はなるべく周囲に人のいない環境で描いてほしいことの3点を文章で提示した。

(2) 対象者

2018年5月にX大学の学部生103名に対し調査を行った。143部を配布し、回収率は72.0%であった。回答に記入漏れのあった7名のデータは除外し、結果96名のデータを分析に用いた。年齢は18歳～21歳、平均年齢は18.64歳、標準偏差は0.72であり、性別の内訳は男性52名・女性44名であった。

(3) 手続き

古野（2005）を参考に、質問紙・描画用の画用紙2枚・均一に削られた2Bの鉛筆1本・消しゴム1つを茶封筒に入れて調査セットとし、授業時間内に配布・回収した。時間内に回収できないものは後日学内の回収箱に提出することを求めた。また、調査セットの配布前には、本研究の趣旨、調査への協力は自由意志であること、一度調査協力への同意を示した後も調査を中断したり同意を撤回したりすることができること、本調査は授業とは何の関わりもないこと、調査データの厳重な管理、匿名性の確保について口頭およびフェイスシートで説明を行った。なお本研究は京都大学臨床心理学研究倫理審査委員会の承認を得た上で調査が行われた。

(4) 分析方法

家屋画の分析には梅村（2016）の分析指標を、室内画の分析には山森（2002）・梅村（2016）¹の分析指標を用いた（表1・表2）。

本研究では、5つのパーソナリティ因子が描画表現に及ぼす影響を検討することを目的としているため、独立変数をBig Five尺度の因子得点、従属変数を家屋画・室内画の各分析指標の有無とした多重ロジスティック回帰分析を実施した。すべての統計解析にはSPSS ver20.0を使用した。オッズ比の信頼区間は95%、強制投入法にて検討した。

¹ 梅村（2016）の項目の1つである「配置図」は山森（2002）の「配置図型」に相当すると考えられたため、今回は分析指標として用いていない。

西：室内画の基礎的研究

表1. 家屋画の分析指標

薄い描線	扉無し
パースペクティブの混在	ドアノブなし
平面の家	扉に窓
立体の家	表札
2階建て以上	扉が浮く
家屋のみ	扉が端
家の周囲	開口部狭い
大きな家	開口部広い
小さな家	道
平らな屋根	数石
とがった屋根	階段・段差
台形の屋根	基線
屋根の材質	地面
大きな屋根	用紙下端に立つ
小さな屋根	ベランダ・縁側
屋根に窓	庭
複数の屋根	柵・塀・植え込み
軒無し	門
煙突あり	ポスト・郵便受け
煙突から煙	木
煙突の材質	花
窓なし	人
格子あり	動物・昆虫
窓一つ	犬小屋
窓が多い	乗り物
窓の鍵	車庫
窓に影	太陽
窓に物	その他自然物
窓枠の強調	
カーテンあり	
カーテンが窓にかかる	

表2. 室内画の分析指標

山森(2002)	梅村(2016)
遠近法型	境界線なし
一部遠近法	奥行き感なし
配置図型	殺風景
正面型	アイテム豊か
多次元型	パースペクティブの混在
	上方から眺める
	等身大の視点
	窓あり
	大きな窓
	小さな窓
	窓に影
	複数の窓
	開け放たれた窓
	格子窓
	窓の鍵
	外の風景
	カーテンあり
	カーテン半閉じ
	カーテン閉じ
	ドア
	ふすま・障子
	開口部なし
	寝具
	テレビ
	テレビ台
	リビングテーブル
	ローテーブル
	こたつ
	サイドテーブル
	カウンター
	デスク
	机上で開かれた本・ノート
	イス(一つ)
	イス(複数)
	ソファ(一人用・カウチ)
	ソファ(複数がけ)
	座布団(一つ)
	座布団(複数)
	クッション
	カーペット
	床の材質
	扉付収納
	開放収納
	本棚
	本
	タンス・クローゼット
	キッチン収納
	暖炉
	ストーブ
	エアコン
	空気の流れ
	天井照明
	ランプ
	家電
	携帯電話・スマホ
	楽器
	キッチンあり
	ダイニング
	食器(一組)
	食器(複数)
	食物・飲物
	時計
	鏡
	カレンダー
	絵・ポスター
	写真・写真立て
	飾り
	文字による説明
	衣服
	服飾小物
	テレビ・写真・絵の中の人
	人
	一人
	複数
	動物・昆虫(窓内)
	動物・昆虫(室外)
	動態表現
	ぬいぐるみ
	おもちゃ
	花
	木

3. 結果

(1) Big Five 尺度の分析

項目ごとの得点の分布を確認したところ、特に問題のある分布を示す項目は見られなかった。また、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、スクリープロットと因子内容の妥当性から5因子が抽出された。因子数と因子構造は先行研究と同様であったので、本研究でもこの結果を採用した。すなわち、第1因子がN、第2因子がE、第3因子がA、第4因子がC、第5因子がOであった(表3)。5つの因子の尺度内の各項目すべてと5つの因子の尺度総得点との間の相関はそれぞれ1%水準で有意であり、これらの尺度内の信頼性係数はそれぞれN尺度が.919、E尺度が.874、A尺度が.846、C尺度が.825、O尺度が.815であった。分析においては、5つの下位尺度の総得点を各因子得点とした。5因子の尺度総得点の記述統計量は表4の通りであった。5因子得点間の相関係数はすべて0.9未満であった。

表3. Big Five尺度の因子分析の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5
$\alpha=.919$					
弱気になる	.846	-.54	.098	.002	-.077
不安になりやすい	.838	.057	.054	-.041	-.045
心配性	.798	.033	-.021	.067	-.156
動揺しやすい	.791	.102	-.087	.074	-.155
傷つきやすい	.774	.095	.042	-.064	.037
悩みがち	.723	-.014	-.103	-.024	.081
憂うつな	.681	-.176	-.115	-.066	.063
緊張しやすい	.671	.031	.151	-.066	-.269
気苦労の多い	.667	.045	-.07	.092	.19
くよくよしない	.664	-.137	.037	.094	-.069
悲観的な	.59	-.256	-.155	-.093	.004
神経質な	.484	-.196	-.16	.249	-.003
$\alpha=.874$					
社交的	.07	.865	.012	.072	.012
外向的	.081	.851	-.073	.022	.016
話し好き	.096	.665	.0	-.074	-.03
陽気な	-.109	.661	.071	-.271	.087
無口な	.024	.628	-.167	.129	-.299
暗い	-.439	.617	.04	.013	-.144
積極的な	.011	.61	-.112	-.03	.252
活動的な	-.155	.586	-.04	-.08	.139
意思表示しない	-.076	.583	-.198	-.129	-.176
無愛想な	.025	.578	.254	.006	-.079
地味な	-.291	.536	-.41	.053	-.12
人嫌いな	-.223	.431	.335	-.046	-.039
$\alpha=.846$					
寛大な	.013	-.06	.807	-.198	.159
短気	-.234	-.255	.787	-.12	-.08
温和な	.095	.019	.746	-.082	.191
怒りっぽい	-.316	-.279	.738	-.028	-.042
とげがある	-.031	.071	.695	.04	-.172
かんしゃくもち	-.233	-.081	.55	-.088	-.283
協力的な	.303	.303	.546	.095	.152
親切な	.404	.178	.531	.06	.271
良心的な	.292	.176	.523	.222	.026
素直な	.05	-.042	.457	.023	-.076
自己中心的	-.218	-.264	.397	.33	-.142
反抗的	-.278	.081	.395	.151	-.036
$\alpha=.825$					
ルーズな	.017	-.181	-.181	.795	-.031
いい加減な	-.056	-.159	.005	.783	-.013
怠惰な	-.256	-.132	.013	.764	.089
軽率な	.162	-.009	.29	.635	-.091
計画性のある	-.005	.128	-.204	.635	.244
成り行きまかせ	.089	-.156	-.194	.601	-.033
几帳面な	.189	.037	.014	.529	-.022
勤勉な	.061	.139	.248	.496	.311
不精な	-.378	.202	-.032	.441	.112
無節操	.005	.286	.246	.4	-.129
飽きっぽい	-.228	-.03	.242	.374	-.011
無頓着な	.112	.12	-.002	.344	-.132
$\alpha=.815$					
想像力に富んだ	-.033	-.092	.13	-.232	.688
頭の回転の速い	-.107	-.134	-.084	.25	.669
独創的な	-.078	-.041	.033	-.276	.66
多才の	-.068	.046	.012	.006	.644
臨機応変な	-.239	.088	-.183	.17	.633
洞察力の多い	-.005	-.197	-.017	.097	.621
のみ込みの早い	.077	.072	-.014	.039	.581
美的感覚の鋭い	.034	-.203	-.065	-.135	.554
好奇心が強い	-.036	.192	.1	-.095	.456
進歩的	.145	.146	.005	.102	.453
独立した	-.193	-.113	.005	.143	.375
興味の広い	-.109	.273	.012	-.19	.353
因子間相関					
F1	-	-.112	-.062	-.095	.034
F2	-.112	-	.216	.152	.161
F3	-.062	.216	-	.175	.063
F4	-.095	.152	.175	-	-.059
F5	.034	.161	.063	-.059	-

表4. 各因子の尺度総得点の記述統計量

	平均値	中央値	標準偏差	歪度	尖度
N尺度	54.92	56.5	12.6	-.41	-.22
E尺度	53.27	53.5	10.7	-.29	-.36
A尺度	55.15	54	9.68	-.02	-.21
C尺度	43.25	42	9.53	.45	.07
O尺度	49.96	49	8.94	.22	.42

(2) 家屋画・室内画の分析

まず家屋画・室内画それぞれの分析指標について、性別(2)×出現の有無(2)のクロス表を用いて χ^2 検定あるいはFisherの直接確率検定を行い性別の影響を確認した(表5)。家屋画分析指標の「煙突あり」($\chi^2(1) = 4.42, p < .05$)「煙突から煙」($\chi^2(1) = 9.70, p < .01$)「カーテンあり」($\chi^2(1) = 4.84, \text{Fisher's Exact } p < .05$)「花」($\chi^2(1) = 6.10, \text{Fisher's Exact } p < .05$)、室内画分析指標の「殺風景」($\chi^2(1) = 6.92, p < .01$)「パースペクティブの混在」($\chi^2(1) = 4.70, p < .05$)「大きな窓」($\chi^2(1) = 6.58, p < .05$)「テレビ台」($\chi^2(1) = 4.45, p < .05$)「カーペット」($\chi^2(1) = 4.70, p < .05$)は性差が有意であったため、多重ロジスティック回帰分析を実施する際に性別を統制した階層的ロジスティック分析を行った。

表5. 家屋画・室内画分析指標の該当度数(%)と検定結果(性差)

分析指標	男性 (N=52)	女性 (N=44)	直接確率	
家屋画				
煙突あり	13(25)	20(45.46)	.036*	男性<女性*
煙突から煙	3(5.77)	13(29.55)	.002**	男性<女性**
カーテンあり	1(1.92)	6(13.64)	.045*	男性<女性*
花	1(1.92)	7(15.91)	.022*	男性<女性*
室内画				
殺風景	28(53.85)	12(27.27)	.009**	男性>女性**
パースペクティブの混在	3(5.77)	9(20.45)	.030*	男性<女性*
大きな窓	4(7.69)	12(27.27)	.010*	男性<女性*
テレビ台	14(26.92)	21(47.73)	.035*	男性<女性*
カーペット	7(13.46)	14(31.82)	.030*	男性<女性*

** $p < .01, * p < .05$

家屋画 家屋画の各分析指標の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果は表6の通りであった。N因子の影響はどの分析指標にも有意なものは見られなかった。E因子の影響は「小さな家」(オッズ比.941, 95%信頼区間.900-.984)「窓一つ」(オッズ比.958, 95%信頼区間.919-.999)で有意であった(「小さな家」が $p < .01$, 「窓一つ」が $p < .05$)。すなわち、E因子得点が高いほど窓が2つ以上かかれやすく、家屋自体の大きさは比較的小さくなりやすかった。A因子の影響は「軒無し」(オッズ比.897, 95%信頼区間.813-.990)「格子あり」(オッズ比1.051, 95%信頼区間1.001-1.103)「基線」(オッズ比1.096, 95%信頼区間1.011-1.188)で有意であった(いずれも $p < .05$)。すなわち、A因子得点が高いほど屋根の軒が描かれにくく、窓に十字以上の格子が描かれやすく、地面の線が描かれやすかった。C因子の影響は「窓枠の強調」(オッズ比1.126, 95%信頼区間1.012-1.188)で有意であった($p < .05$)。すなわち、C因子得点が高いほど窓枠が強調されやすかった。O因子の影響は「家屋のみ」(オッズ比.934, 95%信頼区間.885-.986)「家の周囲」(オッズ比1.063, 95%信頼区間1.007-1.121)「大きな家」(オッズ比1.093, 95%信頼区間1.013-1.179)で有意であった(いずれも $p < .05$)。すなわち、O因子得点

が高いほど家屋以外のものが描かれやすく、家屋自体の大きさは比較的大きくなりやすかった。

表6. 家屋画に対するBig Five各因子の影響

Big Five	描画の分析指標	偏回帰係数	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間		有意確率 (p値)
				下限	上限	
E	小さな家	-.061	.941	.900	.984	.008 **
	窓一つ	-.043	.958	.919	.999	.047 *
	軒無し	-.108	.897	.813	.990	.030 *
A	格子あり	.049	1.051	1.001	1.103	.046 *
	基線	.092	1.096	1.011	1.188	.026 *
C	窓枠の強調	.118	1.126	1.012	1.252	.029 *
O	家屋のみ	-.068	.934	.885	.986	.013 *
	家の周囲	.061	1.063	1.007	1.121	.026 *
	大きな家	.089	1.093	1.013	1.179	.022 *

** p < .01, * p < .05

室内画 室内画の各分析指標の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果は表7の通りであった。N 因子の影響は「ドア」(オッズ比.925, 95%信頼区間.872-.981)「ソファ(複数がけ)」(オッズ比.942, 95%信頼区間.903-.983)「文字による説明」(オッズ比 1.053, 95%信頼区間 1.002-1.107)で有意であった(「ドア」と「ソファ(複数がけ)」が $p < .01$, 「文字による説明」が $p < .05$)。すなわち、N 因子得点が高いほど室内にドアや2人以上がけのソファが描かれにくく、室内に描かれたものについての文字による説明が多くなっていた。E 因子の影響は「窓あり」(オッズ比 1.062, 95%信頼区間 1.014-1.112)「ドア」(オッズ比.920, 95%信頼区間.863-.981)で有意であった(いずれも $p < .05$)。すなわち、E 因子得点が高いほど室内に窓が描かれやすく、ドアが描かれにくかった。A 因子の影響は「窓に影」(オッズ比.747, 95%信頼区間.559-.999)「ドア」(オッズ比.917, 95%信頼区間.846-.994)「ふすまや障子」(オッズ比 1.137, 95%信頼区間 1.001-1.292)「イス(一つ)」(オッズ比.944, 95%信頼区間 1.001-1.292)「タンス・クローゼット」(オッズ比.897, 95%信頼区間.832-.966)で有意であった。(「窓に影」「ドア」「ふすまや障子」「イス(一つ)」が $p < .05$, 「タンス・クローゼット」が $p < .01$)。すなわち、A 因子得点が高いほど室内にふすまや障子が描かれやすく、窓の影やドア、1人用のイス、タンスやクローゼットが描かれにくかった。C 因子の影響は「ドア」(オッズ比 1.076, 95%信頼区間 1.001-1.156)「タンス・クローゼット」(オッズ比 1.080, 95%信頼区間 1.005-1.160)で有意であった。すなわち、C 因子得点が高いほど室内にドアやタンス、クローゼットが描かれやすかった。O 因子の影響は「遠近法型」(オッズ比 1.076, 95%信頼区間 1.017-1.140)「殺風景」(オッズ比.944, .896-.995)「扉付収納」(オッズ比.941, 95%信頼区間.892-.993)「暖炉」(オッズ比 1.145, 95%信頼区間 1.026-1.277)「絵・ポスター」(オッズ比 1.102, 95%信頼区間 1.011-1.202)で有意であった。すなわち、O 因子得点が高いほど遠近法的な奥行きを持った空間になりやすく、室内には暖炉や絵・ポスターが描かれやすかった。一方でアイテムの数が少ない室内空間にはなりにくく、扉の付いた閉じられた収納アイテムが描かれにくかった。

西：室内画の基礎的研究

表7. 室内画に対するBig Five各因子の影響

Big Five	描画の分析指標	偏回帰係数	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間		有意確率 (p値)
				下限	上限	
N	ドア	-.078	.925	.872	.981	.009 **
	ソファ(複数がけ)	-.060	.942	.903	.983	.005 **
	文字による説明	.052	1.053	1.002	1.107	.042 *
E	窓あり	.060	1.062	1.014	1.112	.011 *
	ドア	-.083	.920	.863	.981	.011 *
	窓に影	-.291	.747	.559	.999	.049 *
A	ドア	-.087	.917	.846	.994	.035 *
	ふすまや障子	.129	1.137	1.001	1.292	.048 *
	イス(一つ)	-.058	.944	.894	.996	.037 *
	タンス・クローゼット	-.109	.897	.832	.966	.004 **
	ドア	.073	1.076	1.001	1.156	.048 *
C	タンス・クローゼット	.077	1.080	1.005	1.160	.036 *
	遠近法型	.074	1.076	1.017	1.140	.011 *
O	殺風景	-.057	.944	.896	.995	.032 *
	扉付収納	-.061	.941	.892	.993	.026 *
	暖炉	.135	1.145	1.026	1.277	.016 *
	絵・ポスター	.097	1.102	1.011	1.202	.027 *

** p < .01, * p < .05

4. 考察

本研究では、Big Fiveの各因子が家屋画・室内画の様相に及ぼす影響について検討した。以下、各描画の分析指標について性差および5因子との関連から考察していく。

(1) 家屋画

まず家屋画における性差をみると、[煙突あり][煙突から煙][カーテンあり][花]のいずれにおいても女性の方が男性よりも有意に多かった。おおむね徳田(1981)などの先行研究と同様の結果となった。煙突については男根を象徴すると考えられていたが(高橋, 1974)、今回の結果からはむしろ「家族のあたたかさ」(高橋, 1974)への関心の高さを反映していると考えた方が自然なのかもしれない。続いて家屋の大きさに関する指標をみると、[小さな家]でE因子の影響が、[大きな家]でO因子の有意な影響が見出された。小さな家屋について高橋(1974)は描き手の抑うつ状態を反映すると述べているが、家屋の大きさは描き手が外界に向けてアクションを起こしたり(E)、新しい事柄に好奇心を持ったり(O)する内的エネルギーの大きさを表しているのかもしれない。また、家屋の窓についても[窓一つ]はE因子、[格子あり]はA因子、[窓枠の強調]はC因子というように、複数の分析指標でBig Five因子の影響が見出された。窓は外界との接点であると言われていたが(山森, 1999)、外界へ向ける関心の高さやエネルギーを直接反映すると思われるE因子は窓の枚数に、他者や外界へ向ける態度を反映すると思われるA因子やC因子は窓自体の様相に影響を与えているという結果となったのは興味深い。今回の結果は先行研究の観点を支持することとどまらず、家屋画における窓について詳細に検討する重要性を示唆していると思われる。家屋の屋根部分に関しては、[軒無し]にA因子の有意な影響が見出されたのみであった。また、A因子は[基線]にも有意な影響を与えており、他者と調和的な関係を築くことを志向する傾向にあるほど家屋画に軒と基線を描きやすかった。家屋に軒が備わっているということは家屋画に屋根が比較的大きく描かれていることが想定される。他者と協調していく際に不可欠になるであろう精神的働きを、三上(1995)が言うように家屋画の屋根というアイテムが反映しているとしたら、今回は先行研究を支持す

る結果となったと言えるだろう。一方〔基線〕に関しては、著しく強調されている場合は不安感を表していると考えられている（高橋，1974）。今回の分析では各々のアイテムについてその表現の程度を汲み取ることはできていないが、集団の中に埋没して自己を見失うことのないように自らが拠って立つ場を描こうとする描き手の心の動きが〔基線〕に表れているのかもしれない。最後に、家屋のみを描くか家屋以外の付加物を描くかということについてはO因子の影響が見受けられた。描き手の「イメージや思考の豊かさ」（杉浦・丹野，2008）が付加物の多さに反映されているのかもしれない。一方で付加物が描かれない家屋画に関して描き手が男性の場合は気分の安定と、女性の場合は気分の不安定と関連していることが示唆されており（三溝，2009），付加物を描くことがポジティブな指標であると一概には言えず、今後精査していく必要があるだろう。

(2) 室内画

室内画における性差は、〔殺風景〕にて男性の方が女性よりも有意に大きく、〔パースペクティブの混在〕〔大きな窓〕〔テレビ台〕〔カーペット〕にて女性の方が男性よりも有意に大きかった。家屋画と同様、女性の方が様々なアイテムを多く描きやすい傾向にあると考えられる。室内の空間構成方法の一種である〔パースペクティブの混在〕に性差が見られたことも注目すべきだろう。山森（2002）は室内を見る視点と描き手の主体の在り様との関連を指摘しているが、それだけではなく性別という要因も描き手の視点の置き場に影響を及ぼしている可能性が今回示唆されており、今後室内画を読み取る際に留意すべき点となるかもしれない。Big Fiveの各因子と描画分析指標との関連を見ると、N因子は家屋画では有意な影響を見出せなかったのに対して、室内画では〔ドア〕〔ソファ（複数がけ）〕〔文字による説明〕の3項目において有意な影響が見られていることが大きな特徴である。また、想像力やイメージ、思考の豊かさ、創造性を示すO因子との関連が、〔殺風景〕という室内空間全体の印象に関する指標や、〔扉付収納〕〔暖炉〕〔絵・ポスター〕といった空間を彩る細かなディテールの存在を示す指標において見出されたことも併せて考えたい。以上より、家屋画と比較すると室内画は描き手の心理的特徴に関してより多くの要素を汲み取ることのできる描画法である可能性が示唆される。そして、描き手の心理的豊かさもまた家屋画よりも室内画の方に反映されやすいことが窺われ、それらは空間に配置されたアイテムの数や種類、そしてそれらが醸し出す空間全体の印象に顕著に表れるのではないかということも推測される。さらに空間構成という点でも、〔遠近法型〕にO因子の有意な影響が見出されたことに着目したい。先述したように、描き手が室内空間を見る視点の置き方が描き手の主体の様相の反映であるという観点で言えば、〔遠近法型〕にみられる遠近法（透視図法）には「移ろいやすい現実を自覚しつつもそのなかで自分の身の置き場を保持しようとする意思」がその背景にあると山森（2002）は述べている。すなわち描き手の持つ、自分を軸にしながら主体的に動いていくことのできる力の存在が〔遠近法〕の室内画から窺われるが、これは想像力や柔軟な価値観を持っていることを示す（小塩，2010）O因子の高さと関連が深いように感じられる。ゆえに、室内画においては、描き手の内省する力・内面を構成する力が特に遠近法の有無に反映されるということが可能性として浮かび上がるが、これは山森（2002）や古野（2008）の結果を実証的な観点からも支持するものであろう。加えて、A因

子の影響が大きい指標にも着目したい。A 因子得点が高いほど描かれにくい傾向にある [イス (一つ)] や [ダンス・クローゼット] は、その部屋が個人 1 人のために在る私的な意味合いの強い空間であることが推測される。そして [窓に影] が描かれにくいということは、その部屋の中は部屋の外から見えやすい状態にあるようにも思われる。これらについて「社会や共同体への志向性を持つ」(小塩, 2010) という A の性質から考えると、A 因子得点の高い描き手の、環境や他者との繋がりの中に在る者としての自己のイメージ(梅村, 2016) が室内画に反映されているように思われる。このことから、室内画において描かれた部屋の性質や空間のイメージは、描き手の自己イメージや個の意識の在り様を表現している可能性が考えられる。

先述したように、これまでの研究において室内画を評価する際の観点は“室内の境界線”と“室内空間を見る視点”の 2 つが主であった。しかし今回の結果から、この 2 点だけではなく室内空間の性質や空間の持つイメージ、そして空間全体が与える印象もまた、室内画を読み取る際に重要な観点となる可能性が提示された。なお“室内の境界線”については、今回は有意な結果が見出せなかった。時代的な変化によって境界線という観点に限界が訪れているとも考えられるし、Big Five で測定しているパーソナリティの側面との関連が弱かったにすぎない可能性もあり、この点については今後検討を重ねていくべきであろう。

5. 本研究の意義と今後の課題

本研究ではパーソナリティを包括的に捉える Big Five 尺度と家屋画・室内画との関連が検討された。今回用いられた測定尺度が基づいている Big Five モデルは、広くコンセンサスが得られているとはいえあくまでもパーソナリティ構造を把握する考え方の 1 つであり、経験的アプローチによるゆえに 5 因子構造に関するメカニズムについては考慮されていない(杉浦・丹野, 2008) などの問題点もある。しかし室内画に表れる表現とパーソナリティ特性との関係についてはこれまで検討されておらず、この観点から基礎的資料を提供したという点に本研究の意義があると言えるだろう。室内画の指標はその解釈に関する妥当性が弱いため(梅村, 2016)、本研究でも見出された結果について十分な解釈がなされていないが、実証的なデータを示したことで、室内画を読み取る際の妥当性の向上に寄与していると考えられる。一方で本研究にはいくつか課題も存在する。まず、描画の分析を複数人で行っていないゆえに結果の信頼性や妥当性が低いということが挙げられる。さらに、本研究で用いた室内画分析指標の数の多さから、室内画自体が非常に個性の高い描画であることが推察される。本研究では集団法によって実施し、分析・考察したが、対面法によって室内画を実施し、描き手の“室内空間を描く”ということそのものの体験を踏まえつつそれぞれの室内画の持つ個性について検討することで、室内画という描画の本質により接近することができるのではないかと考えられる。

6. 引用文献

- Bollnow, O. F. (1963). *Mensch und Raum*. W. Kohlhammer. Stuttgart. (大塚恵一・池川健司・中村浩平(訳)(1978). 人間と空間. せりか書房.)
- Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R. (1992). *The NEO-P-I-R professional manual: Revised NEO Personality Inventory (NEO-P-I-R) and NEO Five-Factor Inventory (Neo-FFI)*. Odessa, Fla:

Psychological Assessment Resources.

- 古野裕子(2005). 過換気症候群を抱える人のコーピング・スタイルおよび心理的構えについての一考察. 心理臨床学研究, 23(1), 64-74.
- 古野裕子(2008). 室内画における「まなざし」についての一考察. 心理臨床学研究, 26(4), 455-465.
- 井上亮(1979). 家屋画 2 面法による boundary 概念の検討——精神分裂病者を対象として. 日本教育心理学会第 21 回大会発表論文集, 990-991.
- 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一(2008). Cloninger の気質・性格モデルと Big Five モデルとの関連性. パーソナリティ研究, 16(3), 324-334.
- McCrae, R. R. & John, O. P. (1992). An introduction to the five-factor model and its applications. *Journal of Personality*, 60, 175- 215.
- 三上直子(1995). S-HTP 法 統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ. 誠信書房.
- 小塩真司(2010). はじめて学ぶパーソナリティ心理学：個性をめぐる冒険. ミネルヴァ書房.
- 大山泰宏(2015). 改訂新版 人格心理学. 一般財団法人放送大学教育振興会.
- 三溝雄史(2005). 遠近法表現を通して見た家屋画における視座の研究—YG 性格検査との比較から— . 日本芸術療法学会誌, 36(1, 2), 73-84.
- 三溝雄史(2006). 遠近法表現を通して見た室内画に描かれる境界線の検討——YG 性格検査との関連から—— . 日本芸術療法学会誌, 37(1, 2), 57-66.
- 三溝雅史(2007). 室内画の基礎研究——室内画に描かれる「境界線」の検討（風景構成法との比較を通して）—— . 日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集, 491.
- 三溝雅史(2008). 室内画の基礎研究——室内画分類型とバウムの幹先端処理との関連について—— . 日本心理臨床学会第 27 回大会発表論文集, 325.
- 三溝雅史(2009). 付加物の観点から見た家屋画法の研究. 京都文教大学臨床心理学部研究報告, 1, 133-152.
- 杉浦義典・丹野義彦(2008). 心理学の世界教養編 5 パーソナリティと臨床の心理学 次元モデルによる統合. 培風館.
- 高橋雅春(1974). 描画テスト入門—HTP テスト—. 文教書院.
- 徳田完二(1981). Anorexia Nervosa に関する一研究——描画テストを用いて——. 京都大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊).
- 梅村高太郎(2016). 家屋画・室内画から見た青年期女子心身症患者の心理的特徴—アレキシサイミアとの関連から—. 日本箱庭療法学会第 30 回大会プログラム/発表論文集, 164-165.
- 和田さゆり(1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67.
- 山森路子(1999). 室内画に表現される内的世界についての一考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 373-381.
- 山森路子(2002). パセドウ病患者の空間構成の特徴とその意味 室内画を通してみた主体. 心理臨床学研究, 20(1), 35-43.

(心理臨床学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2018 年 8 月 30 日, 改稿 2018 年 11 月 20 日, 受理 2018 年 12 月 21 日)

室内画の基礎的研究

—Big Five モデルとの関連から—

西 珠美

本研究ではパーソナリティ特性を測定する尺度の1つである Big Five 尺度を用いて、家屋画・室内画と Big Five の各下位尺度との関連を明らかにすることを試みた。103名の大学生を対象に集団法で調査を行い、Big Five の各5因子が描画の分析指標に及ぼす影響について、ロジスティック回帰分析を行い検討した。その結果、室内画を評価する観点に関して、先行研究で演繹的に主張されてきた“室内空間の構成方法”だけではなく、室内空間の持つ全体的な印象や空間自体の性質、空間のイメージも同様に室内画表現を理解する上で重要な意味を持つことがデータから示唆された。今後の課題としては、室内空間を描くという描き手の体験を重視しながら室内画の個別性を検討することで、室内画という描画の本質により接近することができるのではないかとということが考えられた。

Fundamental Study on the Room-Drawing Test: Relationship between the Big Five Model and Drawing

NISHI Tamami

This study was performed to examine the relationship between the Room Drawing Test and each subscale of the Big Five Scale, which is a measure of personality characteristics. We conducted a survey of 103 college students using the collective method, and the influences of the Big Five on analytical indicators of drawing were examined by logistic regression analysis. Evaluation of the Room Drawing Test examined "how to construct indoor space," which was deductively claimed in previous research, as well as the overall impression of the indoor space, the nature of the space itself, and the image of the space. Further, the data suggested that this is important for understanding indoor picture representation. Future studies could involve considering the individuality of indoor paintings while emphasizing the experience of the painter drawing the indoor space, with the goal of exploring the essence of indoor paintings.

キーワード：室内画, Big Five, 基礎研究

Keywords: Room-Drawing-Test, Big Five, Basic research